

出生時および3歳児のBMIとその後の肥満リスクとの 関連

著者	伊藤 早苗, 富松 理恵子, 上西 一弘, 小林 正子, 石田 裕美, 福岡 秀興
雑誌名	DOHaD研究
巻	6
号	1
ページ	58-58
発行年	2017
URL	http://hdl.handle.net/10271/3269

出生時および 3 歳時の BMI とその後の肥満リスクとの関連

○伊藤早苗¹⁾、富松理恵子¹⁾、上西一弘²⁾、小林正子³⁾、石田裕美¹⁾、
福岡秀興⁴⁾

女子栄養大学 給食・栄養管理研究室¹⁾ 女子栄養大学 栄養生理学研究
室²⁾ 女子栄養大学 発育健康学研究室³⁾ 早稲田大学 ナノライフ創新
研究機構⁴⁾

【目的】我が国では出生体重が減少している。小さく生まれ、かつ出生後の急激な体重増加により、肥満や将来の生活習慣病のリスクが高くなるという報告がある。本研究では、出生時および 3 歳時の体格と、その後の発育および思春期における体脂肪率との関係を縦断的に検討した。

【方法】発表者らは、都内の私立中高一貫校において、毎年 4 月に身長、体重、体脂肪率の測定を行っている。本研究の対象者は、2000～2005 年に入学した 1439 名である。対象者の保護者には、2005 年に出生時および 5 歳までの身長、体重について問うアンケート調査を実施した。また、2003～2005 年入学生については、小学生時の身長、体重を健康診断票より転記した。出生時および 3 歳時の身長、体重のデータが揃い、出生 35 週未満の 2 名および双生児として出生した 1 名を除く 750 名を解析対象者とした。男女別に、出生時と 3 歳時の BMI を各々 3 分位にて群分けし、さらにその組み合わせにより 9 群に分類した。このうち、本研究では、①出生時 BMI3 分位未満・3 歳時 BMI3 分位以上群、②出生時 BMI3 分位未満・3 歳時 BMI3 分位未満群、③出生時 BMI3 分位以上・3 歳時 BMI3 分位未満群、④出生時 BMI3 分位以上・3 歳時 BMI3 分位以上群の 4 群について、その後の身長、体重、BMI および体脂肪率の違いを検討した。

【結果】男女ともに全ての年齢で、群による身長の違いはなかった。男女ともに体重、BMI、体脂肪率は、群による有意な差がみられた。特に女子において、小さく生まれて 3 歳時に大きかった①群は、思春期初来時期から BMI の増加傾向が顕著となり、高校 1 年および 3 年時の体脂肪率が他の全ての群より有意に高値であった。

【結論】女子において、「小さく生まれて大きく育つ」ことは、思春期における肥満のリスクを高めることが示唆された。